

訳語によって起る新約聖書 用語の屈折について (4)

加藤 邦雄

引用文献略記

本文中に比較的多く引用する文献をそのまま引用するのはわずらわしいので、それを表わす文字を作って略記する。ただしこれ以外の文献を引用する時はその都度明記したい。

1. Syr……The New Testament in Syriac (Peshitta).
2. Del……Delitsch's Hebrew New Testament.
3. Jenn……Jennings' Lexicon to The Syriac New Testament (Peshitta).
4. Smith……Smith, A Compendious Syriac Dictionary.
5. Levy……Levy, Chaldäisches Wörterbuch.
6. Talm-Midr……Levy, Wörterbuch über die Talmudim und Midraschim.
7. Dalm……Dalman, Aramäisch-Neuhebräisches Handwörterbuch zu Targum, Talmud, und Midrasch.
8. Gesenius……Gesenius, Hebräisches und Aramäisches Handwörterbuch.
9. Köhler……Köhler-Baumgartner, Lexicon in Veteris Testamenti Libros.
10. Lisowsky……Lisowsky, Konkordanz zum Hebräischen Alten Testament.
11. LXX……The Septuagint.
12. Hatch……Hatch-Redpath, Concordance to The Septuagint.
13. Liddell……Liddell-Scott, Greek-English Dictionary.
14. ThWNT……Kittel, Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament.
15. Bauer……Bauer, Griechisch-Deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der übrigen urchristlichen Literatur.
16. Thayer……Thayer, Greek-English Lexicon of The New Testament.

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について (4)

17. Cremer……Cremer, *Biblico-Theological Lexicon of New Testament Greek*.
18. Vulg……*Biblia Sacra*.
19. Concord……*Concordantiarum Scriptorum Biblicum*.
20. Lewis……Lewis, *A Latin Dictionary*.
21. Krebs……Krebs, *Antibarbarus der Lateinischen Sprache, 2 Bde.*
22. Kluge……Kluge, *Etymologisches Wörterbuch*.
23. Paul-Betz……Paul-Betz, *Deutsches Wörterbuch*.
24. Littré……Emile Littré, *Dictionnaire de La Langue Française*.
25. Dauzat……Dauzat-Dubois-Mitterand, *Nouveau Dictionnaire Etymologique*.
26. Oxford……The Shorter Oxford English Dictionary.
27. OxfEty……The Oxford Dictionary of English Etymology.
28. Buck……Buck, *A Dictionary of Selected Synonyms in The Principal Indo-European Language*.
29. Luther……Luthers-bibel.
30. AV……*The Authorized Version*.
31. 口語……口語訳聖書 (日本聖書協会)
32. 広辞苑……新村出編 広辞苑 (第二版)
33. RSV……*The Revised Standard Version*.
34. NEB……*The New English Bible*.
35. TEV……*To-day's English Version*.
36. Jérusalem……*La Sainte Bible traduite en française sous la direction de L'École Biblique de Jérusalem*.
37. Crampon……*La Sainte Bible du Chanoine Crampon. (Nouvell édition 1960)*
38. Menge……*Die Heilige Schrift übersetzt von Menge*.
39. Zürcher……*Zürcher-bibel*.

DIKAIOSYNE

原始教会のケーリュグマの一つとして、使徒行伝13章38—39に伝えられている、言葉の中に、現行口語訳によると、「義とされる」なる語が用いられている。「義とされる」とか「義とする」と言うような表現は恐らくキリスト教会以外ではほとんど使用されていないであろう。試みに広辞苑を開けて見ても「義とされる」も「義とする」もなく、「義認」を載せているが、それは全くキリスト教用語として解釈が付せられている。

新約聖書がギリシャ語で書かれた時、すでにその背景にヒブル語旧約聖書とそれのギリシャ訳である LXX とが広い範囲に亘って存在していた——ヒブル語原典の結集は紀元一世紀末であったことを当然考慮に入れなくてはならないが——ので、「義とする」と邦訳されるギリシャ語 dikaioun の用法を Hatch によって LXX で調べると次のようになる。(括弧の中に便宜上口語訳を挿入した)

- (1) tsadaq 22回 (語義は後述する) qal の形 創世33:26. 詩19:9. 51:4. 143:2. イザ43:9. 43:26. 45:35. エゼ16:52.
pi の形 ヨブ33:32. エレ3:11. エゼ16:51. 16:52.
hi の形 出23:7. 申命25:1. サ下15:4. 王上8:32. 詩82:3.
イザ5:23. 50:8. 53:11. 代下6:23
hithpa の形 創世44:16.
- (2) tsedeq 1回 イザ42:21.
- (3) zakah 2回 ミカ6:11 (罪なしとする), 詩73:13 (心をきよめる)
- (4) rib 2回 ミカ7:9 (訴えを取り上げる), イザ1:17 (訴えを弁護する)
- (5) baḥan 1回 エゼ21:13 (ためし)
- (6) shapat 1回 サ上12:7 (論じる)

LXX における dikaioun 29回の中、22回は tsadaq であり、1回はそれと同一語源に由来する tsedeq である。それ故に、LXX において、dikaioun は大体において、tsadaq のギリシャ語訳であると判断しても大過はないが、他にその頻度が僅かであるにしても(3)から(6)までに掲げたような語のあることをも記憶せねばならぬ。しかし、それにしても、dikaioun なる語の LXX における用法を以上のように調べて見て、(1)の tsadaq が圧倒的に多く用い

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について (4)

られているので、実際上は、(2)以下の他の語をここで割愛して、tsadaq のみについて論じたい。

ヒブル語旧約聖書において、tsadaq は40回ほど使用されているが、LXX において dikaioun と訳された場所は前述のごとく22回ほどである。

これに次いで多く訳されたのは dikaios で、次のように15回ほどある。

ヨブ9:15. 34:5. 35:7. 32:2. 27:5. 箴言17:15. ヨブ9:2. 9:20. 11:2. 13:18. 15:14. 25:4. 40:3.

さらに次のような三つの語が1回ずつ用いられている。

katharizein ダ=8:14.

katharos ヨブ4:17.

amemptos ヨブ22:3.

ここで、1回ずつしか用いられていない三つの語は、その使用回数が極めて少ないので便宜上あえて割愛し、旧約聖書における tsadaq はギリシャ訳においては、dikaioun および dikaios と訳されていると理解して大過はないであろう。

dikaioun および dikaios と密接な関係を持つ名詞は dikaiosynē であって、多種多様の訳があるが、一般的にはラテン語で *justitia*、ドイツ語で *Rechtfertigung*、英語で *righteousness*、フランス語で *justice*、日本語では「義」と訳されることが多い。

新約聖書で dikaiosynē と書かれている語のヒブル的背景をたどるためには、dikaioun の場合と同じように、まず、LXX における dikaiosynē がどのようなヒブル語からの訳であるかを Hatch によって一応調べて見たい。

dikaiosynē は LXX に、240回ほど用いられている（ヒブル語旧約聖書の範囲に限定し、外典は計算に入れないことにする）がヒブル語によって分類し、その使用回数と使用個所とを次に示したい。

(1) tsadiq 5回

詩71(72):7. 箴言2:20. 11:21. 15:5(6). 20:7.

(2) tsedeq 77回

レビ19:15. 申命33:19. ヨブ29:14. 詩4:1. 7:8. 7:17. 8:4. 14(15):2. 16(17):1. 16(17):15. 17(18):20. 17(18):24. 22(23):3. 34(35):24. 34(35):27. 36(37):6. 39(40):9. 44(45):4. 44(45):7. 47(48):10. 49(50):6. 50(51):19. 51(52):3. 57(58):

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について (4)

1. 64(65) : 5. 71(72) : 2. 84(85) : 10. 84(85) : 11. 84(85) : 13. 88(89) : 14. 93(94) : 15. 95(96) : 13. 96(97) : 2. 96(97) : 6. 97(98) : 9. 117(118) : 19. 118(119) : 7. 118(119) : 62. 118(119) : 75. 118(119) : 106. 118(119) : 121. 118(119) : 123. 118(119) : 138. 118(119) : 142. 118(119) : 144. 118(119) : 160. 118(119) : 164. 118(119) : 172. 131(132) : 9. 箴言1 : 3. 2 : 9. 8 : 8. 8 : 15. 26 : 5. 伝道5 : 7. ホセ2 : 19(21). 10 : 12. ゼバ2 : 3. イザ1 : 21. 1 : 26. 11 : 5. 16 : 5. 26 : 9. 26 : 10. 41 : 2. 42 : 6. 42 : 6. 45 : 8. 45 : 13. 45 : 19. 61 : 3. 62 : 1. 62 : 2. エレ22 : 13. 27(50) : 7. ダニ LXX 9 : 24. Dath 9 : 24.
- (3) tsedaqah 127回

創世15 : 6. 18 : 19. 30 : 33. 申命9 : 4. 9 : 5. 9 : 6. 33 : 21. 士師5 : 11. 5 : 11. サム上12 : 7. 26 : 23. サム下8 : 15. 22 : 21. 22 : 25. 王上3 : 6. 8 : 32. 代上18 : 14. 代下6 : 23. 9 : 8. ネヘ2 : 20. ヨブ27 : 6. 33 : 26. 35 : 8. 詩5 : 8(9). 11 : 7. 22 : 31(32). 31 : 1(2). 36 : 6(7). 36 : 10(11). 40 : 10(11). 69 : 27(28). 71 : 2. 71 : 15. 71 : 16. 71 : 19. 71 : 24. 72 : 1. 72 : 3. 88 : 12(13). 89 : 16(17). 98 : 2. 99 : 4. 103 : 17. 106 : 3. 106 : 31. 111 : 3. 112 : 3. 112 : 9. 119 : 40. 119 : 142. 143 : 1. 143 : 11. 145 : 7. 箴言8 : 18. 8 : 20. 10 : 2. 11 : 5. 11 : 6. 12 : 28. 14 : 34. 16 : 12. 16 : 31. 21 : 21. イザ5 : 7. 5 : 16. 9 : 6(7). 10 : 22(23). 32 : 16. 32 : 17. 32 : 17. 33 : 5. 33 : 15. 45 : 8. 45 : 23. 45 : 24. 46 : 12. 46 : 13. 48 : 1. 48 : 18. 51 : 6. 51 : 8. 54 : 14. 56 : 1. 57 : 12. 58 : 2. 59 : 9. 59 : 14. 59 : 17. 60 : 17. 61 : 11. 63 : 1. 64 : 6(5). エレ4 : 2. 9 : 24(23). 22 : 3. 22 : 15. 23 : 5. エゼ3 : 20. 14 : 14. 14 : 20. 18 : 5. 18 : 20. 18 : 22. 18 : 24. 18 : 24. 18 : 26. 18 : 27. 33 : 12. 33 : 12. 33 : 13. 33 : 14. 33 : 16. 33 : 18. 33 : 19. 45 : 9. ダニ9 : 7. 9 : 18. ホセ10 : 12. アモ5 : 7. 5 : 24. 6 : 12. ミカ6 : 5. 7 : 9. ゼカ8 : 8. マラ3 : 3. 4 : 2(3 : 20).

- (4) hesed (h はドイツ語の ch と同じく発音するために h と区別して h の下に点をつける) 9回。

創世19 : 19. 20 : 13. 21 : 23. 24 : 27. 32 : 10(11). 出エ15 : 13. 34 : 7. 箴言20 : 28. イザ63 : 7.

- (5) mishpat 8回

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について (4)

箴言8 : 20, 16 : 11, 17 : 23, マラ2 : 17, イザ61 : 8, エゼ18 : 5, 18 : 17, 18 : 21,

(6) emeth 7回

創世24 : 49, ヨシ24 : 16, イザ38 : 19, 39 : 8, ダニ8 : 12, 9 : 13,

Dath 8 : 12,

(7) zaku 1回 ダニ6 : 22(23),

(8) tob 1回 詩37(38) : 20,

(9) madon 1回 箴言17 : 14,

(10) mesharim 1回 代上29 : 17,

(11) niqayon 1回 創世20 : 5,

(12) pethi 1回 箴言1 : 22

(13) shakal 1回 箴言21 : 16,

(1)から(3)までは同一語源に由来する語であって、最も多く用いられているので、後で論ずることにする。(7)から(13)まではいずれも1回しか用いられていないので、問題としないで割愛しても大過はないであろう。しかし *hesed* (9回), *mishpat* (8回), *emeth* (7回) の三つの語についてはいくらか論じなければならぬ。

hesed は、口語訳によると「いつくしみ」(創世19 : 19, 24 : 27, 出エ34 : 7, 箴言20 : 28, イザ63 : 7), 「恵み」(創世20 : 13, 31 : 10)あるいは「親切」(創世21 : 23)と訳されているが、それが *dikaiosynē* なるギリシヤ語に訳されると、両者の間にかかなりの距離を感じるであろう。しかし、元来、*hesed* が持っていた「いつくしみ」や「恵み」などの意味を LXX の訳者はあえて *dikaiosynē* に含ませようとしたのであった。それは *hesed* と関連のある *hasidim* が「めぐみ深い人たち」の意味でもあれば「敬虔な人たち」あるいは「義人たち」の意味であったことを考えれば容易に理解されよう。

mishpat は元来「さばき」(箴言17 : 28, マラ2 : 17)の意味であるが「公正」(箴言8 : 20), 「公道」(エゼ18 : 5), 「公平」(イザ61 : 8), 「正しい」(箴言16 : 11), 「定め」(エゼ18 : 17, 18 : 21)などと口語訳で訳されている。また、この語はしばしば *tsedakah* あるいは *tsedek* と組み合わせられて使用されることもある。

emeth は *emunah* とよく似た内容をもつ語であるが、(前号の紀要にお

いて筆者はこの emeth について論じたので参照してくだされば光榮である) 口語訳では「まこと」(創世24:49, イザ38:19)「真理」(ダ=8:12, 9:13), 「真実」(ヨシ24:14)「安全」(イザ39:8)と訳されている。この emeth は, mishpat よりは, むしろ, ḥesed に近い位置にある語であって, 一般に「信仰」とか「真実」とか訳される場合の多い語である。しかし, LXX の訳者は ḥesed と共に emeth をあえて dikaiosynē と訳した所に含みがあった。

ヒブル語の tsadiq, tsadaq, tsedakah などと関連のあるアラビア語は tsadaqa や tsidq であろうが, 今日 tsadaqa は die Wahrheitsprechen を第一義とし, tsidq も今日 Die Wahrheit や die Wahrhaftigkeit を第一義として使用されていて, die Gerechtigkeit をあらわす語はむしろ 'adala, 'adl, などになっている。このことから考えると, ヒブル語でも tsadiq, tsadaq, tsedakah など一連の語が, ある意味では, ḥesed や emeth と隣り合って用いられていたと十分推察されよう。Hans Wehr, Arabisches Wörterbuch für die Schriftsprache der Gegenwart. その他アラビア語辞典を参照。

Köhler によると, 旧約聖書ヒブル語原典において tsedaqah は157回, tsedeq は116回, tsadiq は40回ほど用いられている。tsadiq についてはすでに述べた。tsedek と tsedaqah とはその意味がかなり多く重っている。あるいは, ほとんど全くその意味が重っているとも言える。

tsedeq は LXX において, 116回中, 61回まで dikaiosynē と訳されたこと, すでに述べたが, それ以外に, dikaios, dikaioun, dikaiōs を別にして, eleēmosynē (詩35:24) が1回, krisis (イザ11:4, 51:7) が2回用いられていることには注意を払うべきである。なお Köhler の辞典によると次の箇所 tsedek は (その中3回までも dikaiosynē と LXX では訳されているにも拘わらず) Gottes Gnade の意味であると言う, すなわち, 詩65:5, イザヤ42:6, 42:21, 45:13である。これを口語訳では「救」「正義」「義」などと訳しているが, Köhler の解釈とは相当程度相違する。

問題を単純に整理するために, これ以上, tsedeq について追求することを止めて, 専らこれからは tsedaqah を中心として, そのヒブル語本来の意味を探し求め, さらにそれが LXX, Vulg, Luther, A. V. 口語においてどのように訳されたかを明らかにしたい。

tsedaqah のヒブル語としての意味を, Gesenius は第一に “das Richtige, Gebührende, das Recht と規定し, Köhler は, Gerechtigkeit, Untadeligkeit im Verhalten, Rechtlichkeit と規定するが, それだけでは多岐多様に亘る

tsedaqah を適確に把握することはできない。在来長い間、tsedaqah が、旧約聖書そのものにおける用法から帰納的に理解されることは旧約学者によっては当然の事として行なわれていたにしても、しばしば次のような常識的な理解がともすれば読み込まれがちであって、相当の専門家であっても、伝統的な常識的解釈を自明の事として受け入れることがあった。Interpreter's Dictionary of the Bible の中で Achtenmeier が書いている文章を引用したい。

“Righteousness as it is understood in the OT is a thoroughly Hebraic concept, foreign to the Western mind and at variance with the common understanding of the term. The failure to comprehend its meaning is perhaps most responsible for the view of OT religion as ‘legalistic’ and as far removed from the graciousness of the NT.……”

The concept deserves some negative definitions. In the OT it is not behavior in accordance with an ethical, legal, psychological, religious, or spiritual norm. It is not conduct which is dictated by either human or divine nature, no matter how undefiled. It is not an action appropriate to the attainment of a specific goal. It is not an impartial ministry to one's fellow men. It is not equivalent to giving every man his just due.”

同じようなことが、ヨーロッパ大陸でも考えられていたことをよく示す例として ThWNT に Schrenk が書いている文章を次に引用したい。

„Die etymologischen Erwägung von Diestel und Kautzsch, die den Gedanken des folgerichtigen oder normmässigen Handelns Gottes herausarbeiten (nur dass niemals über Gott die Norm steht, er ist sich selber die Norm), heben etwas hervor, was zwar durchaus in tsedaqah erhalten ist, es aber keineswegs erschöpft.”

Tsedaqah の意味は実に多種多様に使用されている。たとえば RSV の用法を見ると次のように訳されている。vindication, deliverance, saving deeds, saving help, righteous help, salvation, equity, right, uprightness, truth, triumph, prosperity. RSV より甚大の影響を受けたと推定される（何となれば RSV が公けに出版される直前、そのゲラ刷りが日本に空輸され、それを翻訳委員が参照していたので）、口語訳において、tsedaqah は次のような

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について (4)

語に訳されている。「義」「公義」「義人」「正しい」「公平」「正直」「権利」「公義」「繁栄」「義とする」「救」。それ故に、tsedaqah を、伝統的に *Gerechtigkeit*, *righteousness*, *justice* などと訳しても、あるいは *Rechtlichkeit*, *straightness* などと訳しても、多種多様の意味を持つその語の基本的な意味を正確に表現することはできない。また、この語は、必ずしも、神と人との間のことがらのみならず、宗教に関係のない、人間と人間との間のことがらに用いられている例もたくさんあるので、それを人間に対する神の要求 (*demand*) とのみ、あるいは神の本質的な属性としてのみ理解することはできない。それで、神と人との間の関係にしても、人と人との間の関係にしても、「関係」概念として扱いたい。

„Vor allem ist festzustellen, dass tsedaqah ein Verhältnisbegriff ist. Gerecht ist, wer Ansprüchen gerecht wird, die jemand an ihn kraft eines Verhältnisses hat.“ (ThWNT)

“Rather, righteousness in the OT the fulfilment of the demands of a relationship, whether that relationship be with men or with God. Each man is set within a multitude of relationship: king with people, judge with complainants, priests with worshippers, common man with family, tribesman with community, community with resident alien and poor, all with God.” (Achtenmeier)

関係概念であれば、その中に *forensic* の内容が当然入って来るであろうが、問題はこの語を単に *forensic* のもののみとして完全に割り切ることができるか否かにある。むしろ、関係概念とすれば、*forensic* のものをも当然その中に含めながら、もっと広義のものであろうから、それは、むしろ契約概念 *covenant concept* (Achtenmeier), *bundesmäßes Walten in Gemeinschaft* (Schrenk) であろう。

tsedaqah は LXX において次のようなギリシャ語に訳されれ。

(1) *dikaiosynē* 約127回、その使用個所についてはすでに述べたのでここでは省略する。

(2) *dikaiōma* 3回 サム下19:28(29)、箴言8:20? エゼ18:21?

(3) *dikaioi* 5回 ヨブ37:23、箴言11:18、11:19、21:5、イザ54:17。

(4) *krima* 2回 イザ9:7(6)、エレ28(51):10。

(5) *eleēmosynē* 10回 申命6:25、24:13、詩23(24):5、32(33):5、102(103):6、イザ1:27、28:17、59:16、ダニ Dath 9:16、tsedaqah とほとんど完全に同意味のアラム語 *tsidqah* をこれに加えると、ダニ4:24。

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について (4)

ダニ Dath 4 : 24.

(6) eleos 3回 イザ56 : 1, エゼ18 : 19, 18 : 21.

(7) euphrosynē 1回 イザ61 : 10.

以上の中で(1)から(3)までは大体同じ系統の語である。(4)は(1)から(3)までの語とは相違するが、その一面を示す語である。(5)と(6)とは大体同一意味であって、注意を払うべき訳語である。それは、人が人に対する「あわれみ」をあらわすにしても、あるいは神の「あわれみ」を示すにしても、ともかく、「あわれみ」と訳されたことを忘れてはならない。(7)は僅か1回しか用いられていないのでほとんど問題として取りあげなくてもよいであろう。以上を要するに、ヒブル語の *tsedaqah* が157回ほど用いられている中で、*dikaio-synē* とその系統のものが135回ほどあるが、それに対して、「あわれみ」を示す語が少なくとも13回あったのであるから、両者の比は10対1である。これが *tsedaqah* についての LXX 著者の理解の仕方である。

紀元400年頃、西方教会において、聖書が *Vulgata* と称せられるラテン語訳にされた時、それは、LXX を相当程度参照しつつ、ヒブル語原典の旧約聖書および、ギリシャ語原典の新約聖書から訳された。新約聖書のことは後に論ずるとして、旧約聖書のラテン語訳において、*tsedaqah* は次のように訳された。

(1) *justitia* 約143回 それは一つ一つ引用するのは余りにも紙面を占めるので、ここでは、これ以外の訳語を掲げ、その使用個所を明示したい。

(2) *justificatio* 2回 ヨブ27 : 6, ダニ9 : 18.

(3) *aequitas* 3回 詩119 : 40, 143 : 11.

(4) *loquor* 1回 サム下19 : 23.

(5) *misericordia* 6回 サム上12 : 7, 詩24 : 5, 33 : 5, 106 : 6, 106 : 1

7. 箴言21 : 3.

(6) *misericor* 1回 申命6 : 25.

(7) *clementia* 2回 士師5 : 11, 箴言11 : 19.

以上の中で、(1)と(2)とは大体同じ系統の語であるので、一つにまとめて理解してよく、(3)も *justitia* の一面をあらわすと言ってよからう。(4)は僅か1回しかないので特に取りあげなくともよい。(5)と(6)とは大体同じ内容であり、(7)は(3)よりも(5)や(6)に近い内容であろう。それで、*Vulg* における *tsedaqah* を大別すると、(1), (2), (3)の合計が147回ほどになる。それに対し

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について (4)

て(5), (6), (7)の合計は9回になる。後者の前者に対する割合は大体6パーセントである。したがって, tsedaqah の中に含まれている「あわれみ」を意味する訳語は, LXX より Vulg において, かなり減少したことになる。これを逆に言えば, Vulg の旧約のみの部分についても, 「あわれみ」を意味するよりも「正義」を意味する *justitia* が大巾に増加したことになる。LXX の *dikaioynē* と Vulg の *justitia* とが果して, 完全に同一の意味を持っているのか, それとも両者の意味する語義の性格や領域がいくらかでも相違するのか, そのことについては後にいささか詳しく論ずることにするが, 結論としてここで一言述べたことを許されるならば, *dikaioynē* と *justitia* とではいささか意味が相違する。

16世紀にルターのドイツ訳が世に公けにされるまで, Vulg は1000年以上ヨーロッパの教会で公認訳として使用され, カトリック教会に関する限り, さらに400年後の今日まで公けに使用されているので, tsedaqah を *justitia* に大体傾いて使用した慣用は目に見えないが, ヨーロッパ人の聖書理解に相当大きな影響を与えておる, と言えよう。そして Vulg における *justitia* の思想はプロテスタントの世界にもある程度の感化を与えた。

ルターのドイツ語聖書において, tsedaqah は次のように訳されている。

(1) *Gerechtigkeit* 約141回 但し, Vulg の場合と同様に, その使用個所を一つ一つ掲げることにはしないで, この訳語以外のものの使用個所のみを明示するに止めたい。

(2) *recht* 4回 創世18:19. 詩106:3. 箴言8:20. エレ33:15.

(3) *gerecht* 1回 ダ9:7.

(3) *Recht* 3回 王上10:9. ネへ2:20. イザ5:23.

(4) *Redlichkeit* 1回 代下9:8.

(5) *gut* 4回 エゼ33:14. 33:16. 33:19. 45:9.

(6) *gute Sache* 1回 ヨブ37:23.

(7) *Güte* 1回 ミカ6:5.

(8) *wohl* 6回 箴言21:3. エゼ18:5. 18:19. 18:21. 18:27.

(9) *Wohltat* 1回 サム上12:7.

(10) *heilig* 1回 エレ4:2.

(11) *fromm* 1回 エゼ33:12.

(12) *Frömmigkeit* 1回 エゼ33:13.

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について (4)

(3) Gnade ミカ7:9.

(1)から(5)までは大体同じような系統の語であるか、あるいは内容が似ているので、それを合計すると、150回になる。

(6)から(3)までを一括することは乱暴であるが、あえて合計すると15回になる。(1)から(5)までの群と、(6)から(3)までのそれとの比は10対1ある。そうすると、この比率は、LXXにおけるそれと大体同じ位であって、tsedaqahの中の大体一割は、Gerechtigkeit以外の意味に解釈されたと言ってよい。Vulgの*justitia*がそのままLutherの*Gerechtigkeit*に相当するか否かについては、根本的な研究を要するので、両者がそのまま機械的に一致していると、ここで断言するわけではない。そのことは、新約におけるLutherの*Gerechtigkeit*の訳語について、ルター自身の解釈を引用する際に再び触れたい。

Lutherに次いで、17世紀に英語に訳されたAVにおいて、tsedaqahの訳は次のようになっている。

(1) *righteousness* 129回 これも余りに多いので、その使用箇所はここに掲げないことにする。

(2) *right* 9回 サム下19:28. ネヘ2:20. エゼ18:5. 18:19. 18:21. 18:27. 33:14. 33:16. 33:19.

(3) *righteous* 2回 士師5:11. 5:11.

(4) *righteously* 1回 イザ33:15.

(5) *justice* 16回 創世18:19. 申命33:21. サム下8:15. 王上10:9. 代上18:14. 代下9:8. ヨブ37:23. 箴言21:3. イザ9:7. 56:1. 59:1. 59:9. 59:14. エレ22:15. 23:5. エゼ45:9.

以上、AVにおいて、旧約聖書のtsedaqahは、(1)から(5)までの語に訳されてはいるが、その理解の仕方はある意味では感心するほど統一されたと言ってよい。すなわち、LXX, Vulg, Lutherにおいて、「あわれみ」をあらわすような語が、10パーセントから6パーセントは残されていたのに、AVにおいて、*righteousness*と*justice*とに、それは完全に統一されている。これは1611年以後今日まで、英語を語るキリスト教界にとっては相当大きな問題を残したのではあるまいか。おそらく、英語を語るキリスト者たちは今日まで、このような事実について、ただの一度も指摘されないまま、tsedaqahは*righteousness*か*justice*であるに相違ないと思い定めているのであろう。

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について (4)

言うまでもなく、justice は「正義」であるが righteousness の内容は多種多様であると、その文脈によって解釈を下すのではあるが、それにしても、tsedaqah を righteousness および justice にほぼ完全に統一したことは、聖書解釈に一定の方向を与えたと言えよう。

RSV の影響を圧倒的に受けていると推定される口語訳において、tsedaqah は次のように多種多様に訳されて、400年来の AV の影響をくつがえした。それ故に、AV およびそれに近接する訳し方をもって、聖書本文に最も忠実であると確信する立場から見れば、RSV および口語訳は鼻もちならぬ訳として批判されているようである。

口語訳において tsedaqah は次のように訳された。

(1) 義 63回

(2) 正義 60回

(1)と(2)との使用個所を具体的に掲げるべきであるが、聖書語句辞典を開けば判ることであるので、ここでは掲げないことにする。

(3) 義人 1回 詩69：27.

(4) 正しい 15回 創世30：33. 申命9：4. 9：5. 9：6. 詩11：7. 箴言16：31. イザ33：15. 45：23. 60：17. 64：6. エレ33：15. エゼ18：22. 18：24. 33：14. ダニ9：6.

(5) 公平 1回 サム下8：15.

(6) 正直 1回 エレ4：2.

(7) 権利 2回 サム下19：28. ネヘ2：20.

(8) 公義 1回 王上3：6.

(9) 繁栄 1回 箴言8：18.

(10) 義とする 2回 詩106：31. ヨエ2：23.

(11) 救 9回 士師5：11. 5：11. サム上12：7. ヨブ33：26. 詩22：31. 36：10. 40：18. イザ46：12. 46：13.

以上述べた11種類の訳語を二つに分けて理解することは全く無謀であるが、あえて、(1)から(8)までと、(9)から(11)までとに分けると、前者は144回、後者は12回になる。その比は一割より小さく8パーセント位であろう。しかし、とにかく、僅か9回であっても「救」と訳されたものがあることは、長い間 AV の強い影響下にあった日本のキリスト者にとっては、相当大きな意味を持っている筈である。

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について (4)

ここで、LXX, Vulg, Luther, AV, 口語訳において、tsedaqah の訳として第一位を占めた語とその使用回数を掲げて見たい。

ヒブル語 tsedaqah	157回
LXX dikaiosynē	127回
Vulg justitia	143回
Luther Gerechtigkeit	132回
AV righteousness	129回
口語 義	63回
正義	60回

これを見て判るようにヒブル語の tsedaqah 157回の中で、ラテン語訳では143回まで justitia と訳したことである。また、この表に直接は出て来ないが、AV の129回に justice の16回を加算すると145回となって、Vulg における justitia の143回とほとんど近い数になることは、果して偶然であろうか。そのことには、単なる偶然と見られないものを考える。AV は Vulg の影響を非常に多く蒙っていると、他のことにおいても考えられるが、tsedaqah の理解の仕方においても、顕著であると言いたい。さらに極言すれば、Vulg においては僅少ながら、justitia 以外に misericordia の語を残しているにも拘わらず、AV が justice の思想で完全に一貫していることは AV が Vulg より legal な思想を多く読み取ったのである、と理解される。

新約聖書ギリシャ語原典において dikaiosynē なる語の出て来る句を一つ一つ書きとめ、それに Vulg, Luther, AV, Syria (Peshitta), 口語訳を並べて見ると、旧約における tsedaqah の場合とは、ある点では極めて類似したことが判明するが、他の点では新約独自の点も明白になった。

まずテキストと、今述べた Vulg より口語訳に至るまでのいくつかの訳との関係について一言したい。我々は今日 Nestle のテキストを使用しているが、Vulg と Peshitta と Luther と AV とは、いずれも Nestle のテキストに対して幾分相違するテキストに依存しているので、以上の訳を機械的に並置させては見たものの、テキストが相違している以上、一致し難い個所がいくつかある。

Nestle に dikaiosynē の語がないが、Vulg や Luther や AV などに、その訳語らしいものがある個所がある。たとえば、ローマ書 9:28, 9:31 後半, 10:3 などである。

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について (4)

これと反対に Nestle に dikaiosynē の語があるが, Vulg, Luther, AV などに, その訳語が見出せない個所がある。たとえば, 黙示録22:11である。マタイ6:11で AV が alms と訳している語は, Nestle では dikaiosynē であるが, AV が使用したテキストでは eleēmosynē である。ただし, dikaiosynē も eleēmosynē も, アラム語としては同一語であったと理解される。

In Aramaic writings the Hebrew tzedakah (or its Aramaic equivalent) mostly means almsgiving, benevolence. A wellknown illustration of this tending in N T times is to be found in Matt 6:1 where the AV has "alms", following the Received Text, and the RV has "righteousness", following the Alexandrian Text, but both evidently go back to the same Aramaic original, the equivalent of the Hebrew tzedakah. (Richardson, The Theological Wordbook of The Bible. p. 203).

新約聖書テキストの読み方にはいろいろあるが, 今日普通には, dikaiosynē は88回位用いられていると見てよいであろう。

Vulg において dikaiosynē は次のように訳されている。

- (1) justitia 84回, この個所を一つ一つ掲げる用意はあるが, それよりも(1)以外の個所はすべて justitia である, と言い直した方が早い。
- (2) justus 1回 ヨハ【3:10,
- (3) equitas 2回 使徒17:31, (ロマ9:28),
- (4) justificatio 1回 ロマ8:10,

以上で判るように equitas 1回のみが, 他の訳と幾分相違した意味を持っている。もちろん, equitas も justitia の中に含まれる, と解釈することは十分可能である。justus は justitia と同一系統の語である。justificatio も, 語源的には justitia や justus と同一系統の語であるが, 内容から見れば, justitia と区別できないこともない。それにしても, justificatio は1回しかないので, dikaiosynē は大体 justitia 一色で理解されていると言ってよい。

Luther において, dikaiosynē の訳と考えられる語が89回ほどあるが, その中で,

- (1) Gerechtigkeit 76回
- (2) Die Gerechtigkeit, die vor Gott gilt と特に訳した個所 5回 ロマ 1:17, 3:21, 10:3, 10:4, コリII 5:21,
- (3) Recht 5回 使徒10:35, ヤコ1:20, ヨハ【2:29, 3:7 3:10,
- (4) gerecht werden 1回 ロマ10:10,

以上によって判るように、89回中、それもほとんど同じ意味と言ってよいのであるが、幾分相違するのは Recht の5回である。結局 Luther は dikaiosynē を Gerechtigkeit と理解したと言える。ただ、Luther と AV との相違は次の点にある。すなわち AV は単に righteousness とか justice とか訳したが、Luther は単に Gerechtigkeit と訳したのみならず、特に die Gerechtigkeit, die vor Gott gilt と、積義的な語を加えざるを得なかった。

„Gerechtigkeit ist nu solcher Glaube! Und heisset Gottes Gerechtigkeit oder die für Gott gilt darumb das sie Gott gibt und rechent für gerechtigkeit umb Christus willen unsern Mittler und macht den Menschen das er jederman gilt was er schuldig ist.“ Luther Vorrede auff die Epistel H. Pauli: an die Römer.

AV は、dikaiosynē と理解される語を90回位用いているテキストに依っているが、その中で、

- (1) righteousness 89回
- (2) righteous 1回 黙示22:11.

righteous と righteousness とが同一系統の語であることは言うまでもないが、この場合 righteous と訳された黙示録22:11はテキスト上いささか疑問がある。それ故に、AV において、dikaiosynē はほとんど完全に righteousness の一語に訳されたと言ってよい。

紀元六世紀頃、エデッサ付近でシリア語に訳された Peshitta と呼ばれる新約聖書（と言ってもその頃のテキストそのままではなくて現代において増補された形であるが）において、dikaiosynē は次の二つの語に大体半々に用いられている。

- (1) Kinuta 48回

マタ3:15, 5:6, 5:10, 5:20, 21:32.

使徒10:35, 13:10, 17:31.

ロマ1:17, 3:5, 3:21, 3:22, 3:25, 3:26, 4:9, 4:11, 4:11, 4:13, 4:22, 5:17, 5:21, 6:13, 6:16, 6:18, 6:19, 6:20, 8:10, 9:30, 9:30, 9:30, 9:31, 9:31, 10:3, 10:3, 10:4, 10:5, 10:6, 14:7.

テモII 2:22, 3:16, 4:8.

ヘブ1:9, 5:13, 7:2, 11:7.

ペテI 3:14.

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について (4)

ペテ II 2 : 5.

黙示 19 : 11.

(2) zadikuta 42回

マタ 6 : 1, 6 : 33.

ルカ 1 : 75.

ヨハ 16 : 8, 16 : 10.

使徒 24 : 25.

ロマ 4 : 3, 4 : 6, 10 : 10.

コリ I 1 : 30.

コリ II 3 : 9, 5 : 21, 6 : 7, 6 : 14, 9 : 9, 9 : 10, 11 : 15.

ガラ 2 : 21, 3 : 6, 3 : 21, 5 : 5.

エペ 4 : 24, 5 : 9, 6 : 14.

ピリ 1 : 11, 3 : 6, 3 : 9, 3 : 9.

テモ I 6 : 11.

テト 3 : 5.

ヘブ 12 : 11.

ヤコ 1 : 20, 2 : 33, 3 : 18.

ペテ I 2 : 24.

ペテ II 1 : 1, 2 : 21, 3 : 13.

ヨハ I 2 : 29, 3 : 7, 3 : 10.

黙示 22 : 11.

シリア語の Kinuta はアラム語の kinuta または kunatha とも関係を持つ。さらにそれはヒブル語の Ken (そのように、正に、を意味する) や Kun (まっすぐにする、方向づける、さばく、注意を与える、などの意味) にまでもさかのぼることのできる語である。kinuta と完全に同一の形のアラム語を筆者は知らないが、Keivan, Keivntha, Keivanah などはアラム語で Rechlichkeit の意味である。ついで乍ら、ヒブル語の Ken はギリシャ語では Kannē や Kanna になり、ラテン語では canna となり、英語では cane となり、いずれも、尺度であり、まっ直ぐなことを意味し、正典を意味する canon とも関連がある。シリア語の kinuta はマタ 3 : 15. ルカ 1 : 6. ロマ 4 : 13 では rectitude, righteousness を、テモ I 3 : 16 では godliness を、使徒 28 : 4 では justice を意味する。

シリア語の zadikuta はその音によって直ちに気付くように、ヒブル語の tsedaqah と同じ系統の語である。

ギリシャ語の dikaiosynē の旧約的背景を意識すれば、それは tsedaqah

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について (4)

か tsedeq. のギリシャ訳として受け取らるべきであったが、紀元6世紀前後になると、ヒブル語もすでに死後になってから久しくなり、元来セム語系統であるシリア語の世界にもギリシャ語その他インドヨーロッパ系統の語がいくらか混入した。Peshitta の著者は、dikaiosynē を、tsedaqah や tsedeq に近いシリア語に完全に復元しないで、別の系統の語をその半まで使用した。新約聖書がインドヨーロッパ系の一つであるギリシャ語で書かれ、それからセム系のシリア語に訳されても、セム語への復元は半分しか成功しなかった、と今日から見れば言えそうである。この意味から言えば、新約聖書のヒブル語訳である Delitzsch 訳、Ginsburg 訳その他の訳の方が、ある意味では、完全なセム語への復元として、便利である。しかし、アラム語と姉妹語であるシリア語を読むことによって、イエスやその直弟子たちの用いたアラム語の調子を不完全ながらも知ることはできる。

最後に、口語訳新約聖書における dikaiosynē の訳を見ると次の如くである。その一つ一つの個所は、旧約の場合と同様に聖書語句辞典によって知ることができる。

- | | |
|-------------|-----|
| (1) 義 | 80回 |
| (2) 正しいこと | 1回 |
| (3) 正しい | 2回 |
| (4) 正義 | 3回 |
| (5) 義とされる | 2回 |
| (6) 義と認められる | 1回 |

日本語で、義と正とはかなり近い関係にあるので、極めて大まかに言えば、dikaiosynē は日本語訳では、大体において「義」と訳されていると言ってよい。

ギリシャ語の dikaiosynē が Vulg, Luther, AV, Peshitta, 口語訳において、最も多く訳された語と、その使用回数とを掲げて見たい。

ギリシャ語	dikaiosynē	88回
Vulg	justitia	84回
Luther	Gerechtigkeit	81回
AV	righteousness	89回
Peshitta	Kinuta	48回
	zadikuta	42回

口語訳 義 80回

以上のごとき表によって判断すると次のようなことが言えるであろう。

第一に、シリア語 Peshitta は他のものに比して全く類を異にする。

第二に、dikaiosynē の88回に対する他の訳語の比を見ると、AV の righteousnes が89回、Vulg の justitia が84回、Luther の Gerechtigkeit が81回、口語訳の「義」が80回である。

第三に、旧約の tsedaqah の訳を見ると、その理解の仕方にかかなりの多様性があるので、ことに現代語訳で、その訳し方にはかなりの振幅がある。しかし、新約の dikaiosynē の訳語には、現代語訳でも、ほとんど全く一律で、振幅がほとんど見られない。

tsedaqah や tsedeq の訳で本来あった筈の、あるいはそれと密接な関連を持っていた筈の、dikaiosynē, justitia, Gerechtigkeit, righteousness, 「義」なる訳語の意味を順を追うて、検討し、ことに、それらの訳がなされた時代の文化的、思想的背景をも幾分考慮に入れて理解したい。

dikaiosynē は dikē に由来する。dikē は dikēn なる副詞的用法になると、in the way of とか after the manner of の意味であって、dikē は custom や usage を、第一義として意味する。それが order や judgment の意味にもなるが、本来は custom の意味である。dikaiosynē は、ギリシャ都市国家において多く用いられた語であるので、その都市の秩序を意味し、支配者と被支配者との間の調和的秩序や、各階層の調和を意味した。それから、法の秩序や、法廷用語として forensic の用法も出て来たが、元来は、人と人との間の調和を基本とした秩序の意味であって、都市国家を最初 cosmos と呼んだギリシャ人の考え方によく一致したものであった。その最もよい例として、プラトン、ことにその「共和国」その他における用法を挙げるができる。それについては、Every man's Library に収められている Augustine の The City of God への序文を書いた Ernest Barker の文章を引用したい。

Language plays great tricks with the human mind. Words of a mixed and wavering content are the greatest of all tricksters. Among these words is the Latin word *justitia*. When the thought of the Greeks — the thought of Plato and St. Paul — came to the Latin West, these came with it the word dikaiosynē, which (so far as it has an equivalent

in our language) may be translated “righteousness”. The translation which it received in the Latin language was *justitia* and that translation had large (and sometimes disastrous) consequences in the field of theology and of moral philosophy. *It legalized a term which in the original Greek was something more than legal; and a legal tone (a tone of wrongs, penalties, sanctions, and justification).* Thus came to affect the thought of Latin Christendom. This had not been the tone of Greek writers. Plato, for example, had written a dialogue called the Republic, or Concerning Righteousness (*Politeia ē peri Dikaiosynēs*); but the right (to *dikaiōn*) had meant for him the ideal good of a society in the whole range of its collective life (and *not merely in the field of legal relations*), and righteousness had meant the ideal goodness of a whole society and all its members. The idea of righteousness in Plato was a moral idea (which at its highest seemed to pass into a religious idea) rather than an idea of law; and what is true of Plato is also true, and even more true of St. Paul and this use of the idea of righteousness. It is also true, as we must now proceed to show, of St. Augustine.

justitia は元来 *justus* に由来する。*justus* は *jus* に由来する。*jus* は Sanscrit の *yu* (すなわち to join) に由来する。*justitia* と *jus* とは不可分であって、*jus* は binding や obliging の意味をもつ。それは、*lex* が *ligo* すなわち binding の意味をもつのとよく似ている。Cicero において *justitia* は神の法に一致した意味での行為の「正しさ」を意味した。それ故にラテン文化の唯中でラテン教父がギリシャ語の *dikaiosynē* を *justitia* と訳した時、翻訳者は十分にヒブル語の背景を意識したとしても、一度それがラテン語に訳され、それが数百年間、ヒブル的背景と全く無関係に、ラテン語として用いられた時、解釈にある程度の屈折が生ずるのは必然であった。ことに、ラテン教父の中で代表的な人々の中には、キリスト者に成る前に法律家であった人が少なくない。かれらの発想と表現がラテン文化の特色の一つである、ものを legal に考える傾向を持っていたことを誰も否認しないであろう。

Luther において、*dikaiosynē* の意味ことにパウロにおける独自の用法などをルターが意識して、それを単に *die Gerechtigkeit* と訳すのみならず、

die Gerechtigkeit, die vor Gott gilt と訳したことの意味については、すでにルターその人の文章を引用して指摘した。しかし、それにしても, Gerechtigkei は gerecht あるいは recht に由来し, Hermann Paul によると, それは Berechtigung あるいは rechtmässiger Anspruch woran と言うような意味であって, die jetzige Bedeutung ist dem Rechtsgeföhle entsprechend. と言うごとくである。そこから Urteil, Verteilung, Srafe, Vorwurf, Entrüstung 等の意味も出て来る。

righteousness は right に由来する。right は古くは Sanscrit の rta や rju にまでさかのぼるが、いずれも straight の意味である。それはラテン語の rectus やドイツの recht とどこかで関連することによって、判るように相当古い時代から早くも legal の意味を持っていた。Oxford によると righteousness は次のように規定されている。The quality or condition of being righteous; Conformity of life or conduct to the requirements of the divine or moral law; specially in theology applied e.g. to the perfection of the Divine Being, and to the justification of man through the atonement.

そして Oxford はその次に righteousness の複数形が1611年以来 righteous deeds の意味に用いられたことも付記する。

Harvey の A Handbook of Theological Terms の Righteousness の項で彼は次のように述べる。

Medieval theologians generally regarded the righteousness of God as God's retributive justice by virtue of which he regards the good and punishes the wicked, a meaning implicit in the Latin justitia which was used in the Latin Bible (the Vulgate) to translate the Hebrew and Greek words above. …………… It was not a problem of reconciling God's justice and his mercy but of redefining his justice in terms of his mercy.

Jérusalem や Crampon のフランス訳で多く justice が用いられているので、正確を期するために Littré の辞典から次のように引用したい。

Règle de ce qui est conforme au droit de chacun "Pleisante justice qu' une revière borne", Rasc. Pens. 111.3.

Justice distributive, qui adjuge à chacun ce qui lui appartient.

諸橋、大漢和辞典によって「義」の項を引くとかなり多くの意味に分類されているが、その第一義は次のように説明されている。「よい、礼儀行為が

事宜に合致する。又その礼儀行為、事宜を知り、恥を知り、為すまじきを為さぬこと。」要するに東洋的な礼儀に関することがらであると共に、恥を知るという日本的倫理の基本にあるものにも触れている。

最近にその改訂版が出た、広辞苑によって「義」を引いて見ると次のようになっている。

(1) 道理，条理，物事の理にかなっていること。人間の行なうべきすじみち。(仁義礼智信)

(2) 利害をすてて条理にしたがい，人道のためにつくすこと。

(3) 意味，わけ，言葉の内容，語義，講義。

(4) 他人と名義上，親子，兄弟など肉親としての縁を結ぶこと。

(5) 実物の代用とするもの。義手。

そして「義は君臣，情は父子」とか「義を見てせざるは勇なきなり」などと言う句が引用されている。

漢和大辞典と広辞苑とでは説明の仕方が異なっているが，東洋的な，義理人情の「義」が理解できた。

明治時代に訳された元訳も，大正時代の改訳も，そして昭和時代の口語訳も，*tsedaqah*, *tsedeq*, *dikaiosynē* を大体において「義」と訳して来た。それはドイツ訳の *die Gerechtigkeit* や英訳の *righteousness* と共に，今日でも，絶対に改められない訳語であろうか。

試みにロマ書 1:17を二つの新しい英訳によって示したい。

“here is revealed God’s *way of righting wrong*,” … (NEB)

“the gospel reveals how God *puts men right with himself*.” … (TEV)

新約聖書がギリシャ語で書かれた時，その執筆者の多くは本来アラム語を語る者であった。あるいはアラム語とギリシャ語とを語る者であった。きわめて少数の執筆者の中には主としてギリシャ語を語り，アラム語を僅か理解する者もあったかも知れない。しかし，新約聖書を全体として見る時，直接にヒブル語の旧約聖書がその背景にあり，またギリシャ語訳なる LXX が背景にあった。新約聖書執筆者が *dikaiosynē* なる語を書いた時，ヒブル語からの屈折があったとまでは言えないとしても，最小限度において，ヒブル的な思想の背景を十分に理解した上でその語を用いたと言えよう。それから400年近くたった時，Vulg に翻訳された。その翻訳者はヒブル語とギリシャ語とをよく理解して，それをラテン語に移した。しかしラテン語に移され

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について (4)

ると共に、いくつかの屈折はおそらく避けられなかったであろう。それから100年以上たって東方教会ではセム語系のシリア語に訳されたがセム語の発想を必ずしも完全に回復しなかった。Peshitta は西方教会に全く知られないで、近代になってから、Vulg を参照しつつ、原典から聖書はヨーロッパ各国語に訳され、日本では漢訳を手掛りとし、英語訳を主な参考にして明治、大正時代の訳ができた。そこに、二重、三重の屈折が訳語に起きたことは当然である。

現代の多くの読者は、現代人の語感によって訳文を理解するがそこに原典からの何回目かの屈折がある。

(1969.11.18 稿)

Studies in the Refractions found in the New Testament Translations (4)

Kunio KATO

It is taken for granted that when the New Testament, primarily written in Greek, was translated at first into such classical languages as Latin, Syriac etc, later into modern European languages as German, English, French etc, and at last into Japanese, there was some degree of so-called semantic refraction in the process of translation, because there were slight but inevitable differences in the expressions as well as in the ways of thinking of the peoples who spoke or speak in these languages.

The writer, carefully reading through the Greek text and then many versions written in Latin (Vulgate), French (Jérusalem Bible, Crampon's), German (Luthersbibel, Zürcherbibel, and Menges-bibel), English (AV, RSV, NEB, TEV), Syriac (Peshitta and modern Syriac NT), Arabic, Hebrew and Japanese, came to know that he finds two types of refractions in the process of translating the New Testament into other languages, viz. on the one hand the Indo-European type, especially the West European, and on the other hand the Semitic.

The writer tries to prove in this paper that the meaning of Greek "dikaiosyne" which had a Hebrew or an Aramaic background found in the Old Testament was changed, although only slightly, when "dikaiosyne" was translated into "Justitia" in Latin, because he finds a trend that the Latin "Justitia" emphasizes the legal aspect. When Latin "Justitia" was translated into such West European words as "die Gerechtigkeit," "righteousness," and "la Justice," Latin Justitia much influenced these modern European vocabularies, because we find much legal sense in these words. We Japanese Christians use "Gi" as an equivalent of Greek "dikaiosyne," but we find a different nuance, originated from a Chinese character.

Methodological Approach to Thought History of Israel

Yasuoki YAMASAKI

This is the interim report as intermezzo between the introductory monograph issued in the last number of 'Hokusei Ronshū' and the main one intended to issue in the next number.

And this is a preparatory trial for a next report, reflecting myself on my methodological approach, in relation to the interpretation of 'Methodological Approach to Thought History of Israel' reported by